

欣奏累遣。感謝歡招。渠荷的歷。園莽抽條。
欣び奏まり累いを遣り、感み謝して歡び招く。渠荷は的歴として、園莽は條を抽んず。
喜びの情が集まれば、煩わしさは去り、憂いが去れば歡喜の情がやってくる。溝に咲いた蓮の花はあざやかで、庭園の草木は枝を茂らせる。

※昇段試験随意部参考（半紙・条幅）としてもご利用下さい。抜粋可。

一字書（三月二十二日締切）

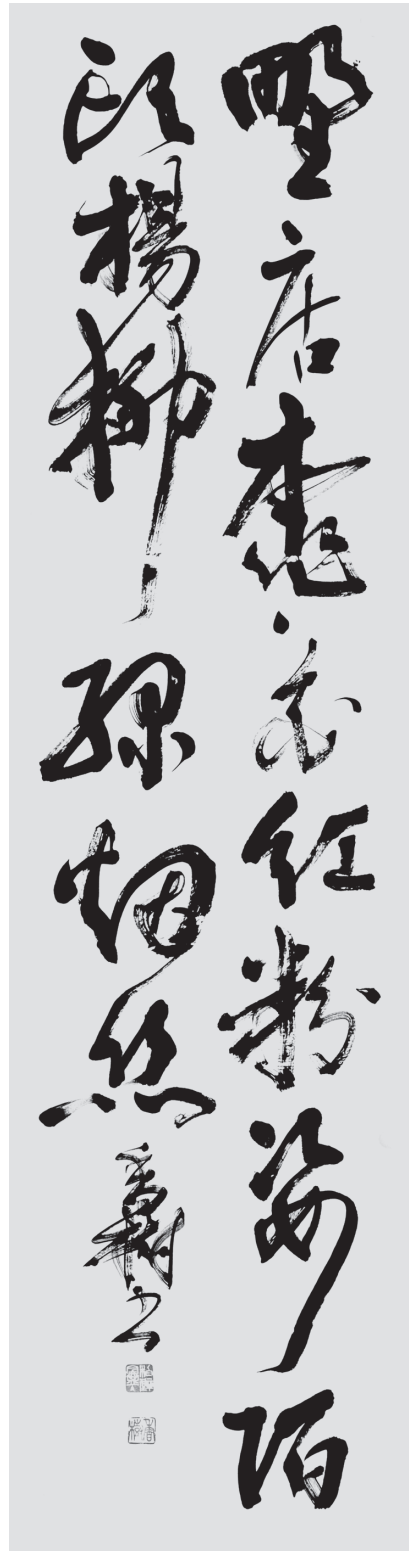
課題

礎

- (1) 書体自由
 - (2) 半紙タテ ※ヨコは中止
 - (3) 落款は余白に調和を工夫し書き入れる
 - (4) 出品料 四四〇円
 - (5) バーコード券貼付 太枠内の臨昇の隣の空欄に
- 一字と記入 段級は無記入

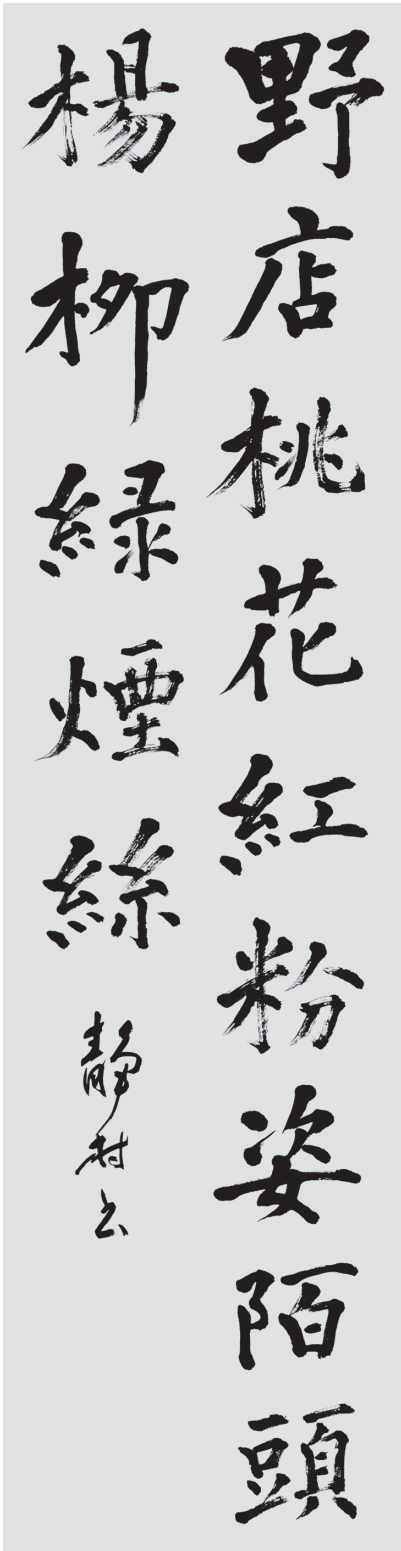
A
高橋 香樹 会長 書

野店桃花紅粉姿 陌頭楊柳綠煙絲 (趙孟頫)
野店の桃花紅粉の姿、陌頭の楊柳綠煙の糸。



B
鈴木 静村 先生 書

今回は、行書五字、草書九字による構成。二行目は、画数の多い字が並ぶ為、草書を多用。連綿線は「楊柳」、「煙絲」の二箇所だが、次字への意識を常に持って運筆。「桃」の草書は、旁を木偏の下におく形多い。「煙」は「烟」も多い。字典参照されたい。墨継ぎは「姿」と「緑」。



この課題作は兼毫の三号筆を用い、一筆で三、四字を書いています。一字毎の墨継ぎは不可。楷書であっても筆脈、脈絡の用筆が根底。始筆(打込み)は「突き立ててバネを強く」、縦画のハネは、ハネの意識より脈絡意識。木偏、糸偏の文字が夫々三字ずつあるが(桃、楊、柳、紅、緑、絲)、これらの偏の対処は特に変化を意識することなく、自然体で書くこと。落款は柔軟に行書体で変化をつけると、和らいだ感で収まる。

訳：茶店のほとりに咲いている桃の花は、べにおしろいの粧を凝らした美人の姿のように見え、野路の柳は新芽が出て緑の煙のように長い枝を垂れている。

予告 (四月二十二日締切)

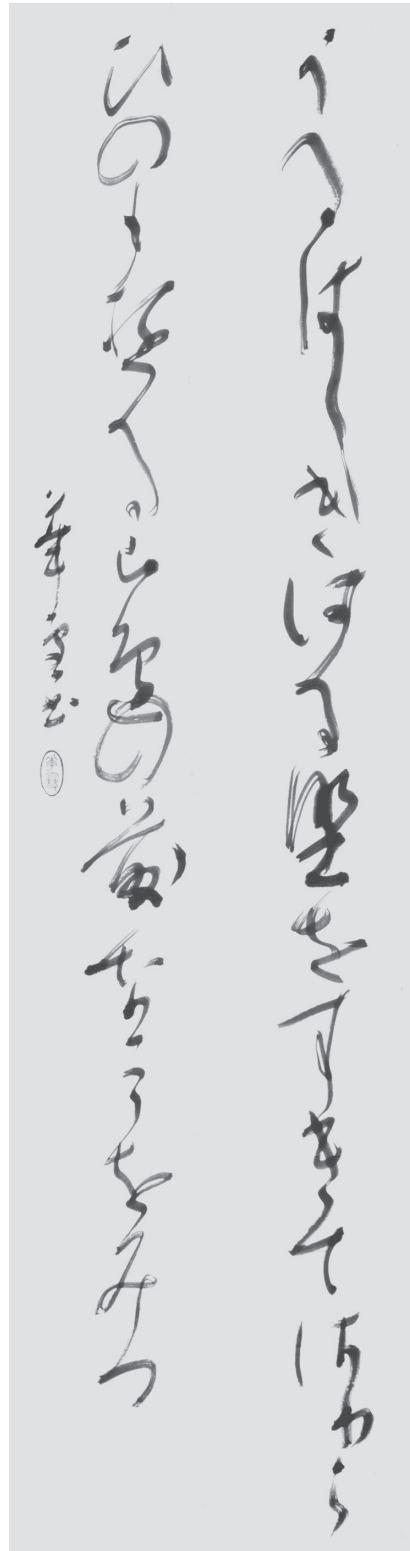
松樹千年遂是朽

槿花一日自成榮 (白楽天)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A
平岡華雪先生書

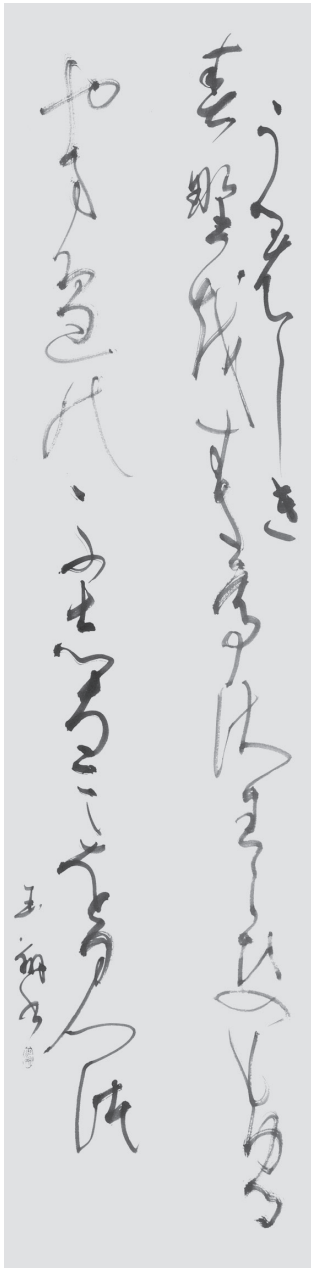
うるはしき春野を過ぎてさわらびの萌ゆる山邊の藤浪をみつ(尾山篤二郎)
うるはしきはる野をすきて佐わらひのも遊る山邊の藤な三をみつ



B

福田玉翔先生書

うる者しき春野越す支亭佐土らひのもゆるや万邊能ふ志奈三を見徒



学び方

半切二行書きの前半を、三行にして全体としては二行にまとめました。使用する変体仮名はご自分のオリジナルで工夫してください。昨年の九月号より条幅作品の草稿を自運していただくように解説してきましたが、第一部の高段者は創作を楽しめるようになりましたでしょうか？
展覧会とは違って、毎月の出品には、草稿を自分で作ることを目標に訓練するのが良いと思います。初心者は手本通りに書くことも時には必要ですが、そればかりでは手本から抜け出せません。「草稿を自運する訓練」は「できる」「できない」ではなく、「やってみるごと」が大切です。その上で師匠のアドバイスを受けながら作品づくりをしてください。

予告 (四月二十二日締切)

春山の尾根もどろと燃ゆる火のたちまちさびし消ゆらく思へば(北原白秋)

尾山篤二郎 (一八八九～一九六三)

歌人・国文学者・書家。石川県金沢市出身。窪田空穂を慕い、『國民文學』の同人になり上京。若山牧水の主宰雑誌『創作』の復刊に参加。齒に衣を着せない評論でも知られる。歌は日常語を多く用いた平明で自由な歌風。歌集『とふのすがごも』と『大伴家持の研究』の業績により日本芸術院賞受賞、東京大学にて文学博士号取得。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

内藤 香瑶 先生 書

樂與數晨夕 (陶淵明)
与ともにしんせき晨夕しほをか数かせんかことをたが樂たがえたがばたがなり。

樂與數晨夕
樂與數晨夕
樂與數晨夕

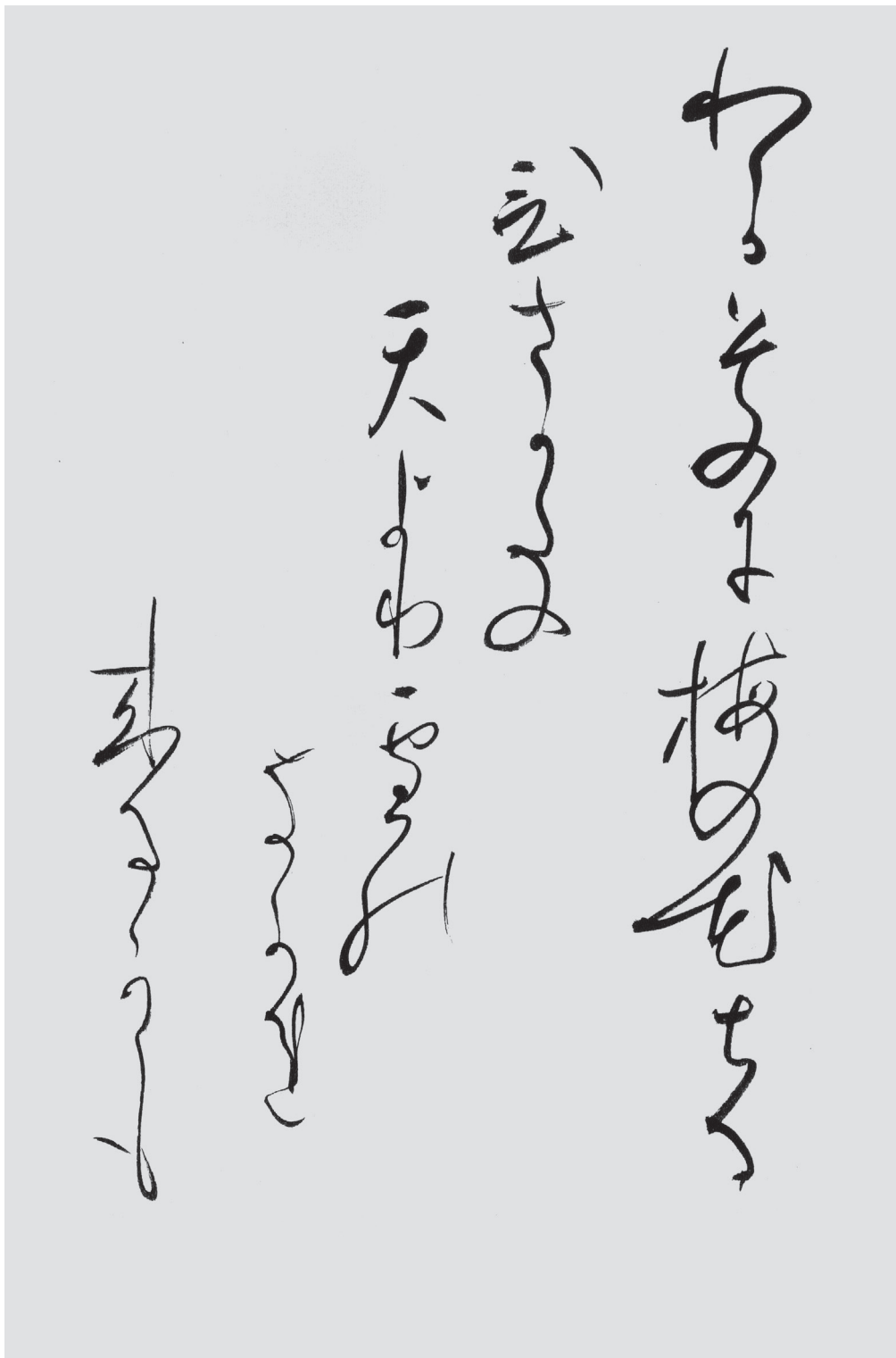
香瑶 書


訳：かれらと朝夕をともに過ごしたいと願ったからである。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高塚竹堂先生書

わがそのに梅の花ちる久方の天より雪の流れ来るかも (万葉集 大伴旅人)



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

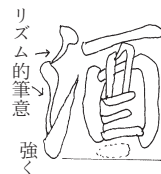
平岡華雪先生書

酒を傾くるは春に逢うを貴ぶ（宋之間）
訳：酒を傾けるのは春の頃が一番よい。

逢 春 傾 酒 貴

〈接筆に神経を〉
「春、酒」の末画部分、「傾、貴」末部（ハ）は、それぞれ締めとしてポイント部分。左右の各画との接筆（画のくっつき方）に神経を働かせてほしい。締めの利いた活きの字を。

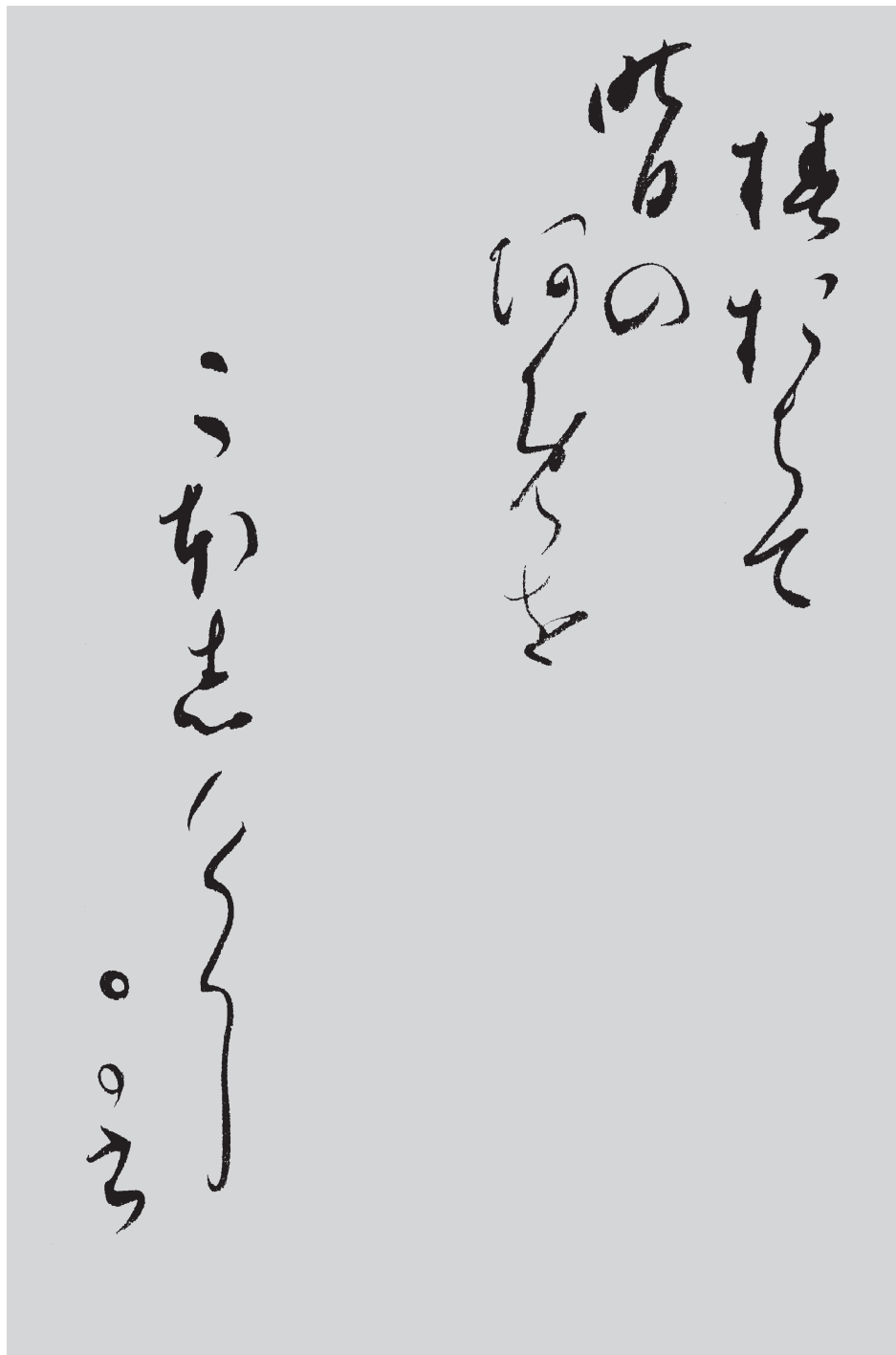
リズム的筆意
強く



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

平岡華雪先生書

椿落^{つばさおち}て昨日^{きのふ}の雨^{あめ}をこぼしけり (蕪村)
 椿^{つばさ}於^おちて昨日^{きのふ}の阿免^{あめ}をこ本志^{ほんし}介^{けり}



〈概観として〉

右群三行、左群は一行に落款を寄せ、構成の注目は、各行頭に段差、なお行末にも相違の工夫。連綿は右から三字、二字（漢字）、二字。左群は放ち書きに最後二字連綿。その他留意点として草体の崩し方（椿・昨）は字典にてよく確かめ、なお変体六字も既習ながら、事前に充分な練習を切望したい。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

山田紫苑先生書

春近郊原思夢蝶 雪殘池館見真梅 (李彌遜)
 春は郊原に近うして夢蝶を思い、雪は池館に残して真梅を見る。

春近郊原思夢蝶
 雪殘池館見真梅
 紫苑書

訳：春色は野べに訪れそめて蝶も夢に入るが、雪は池上の亭館に消えのこり真の梅花を見る。

向山朴花先生書

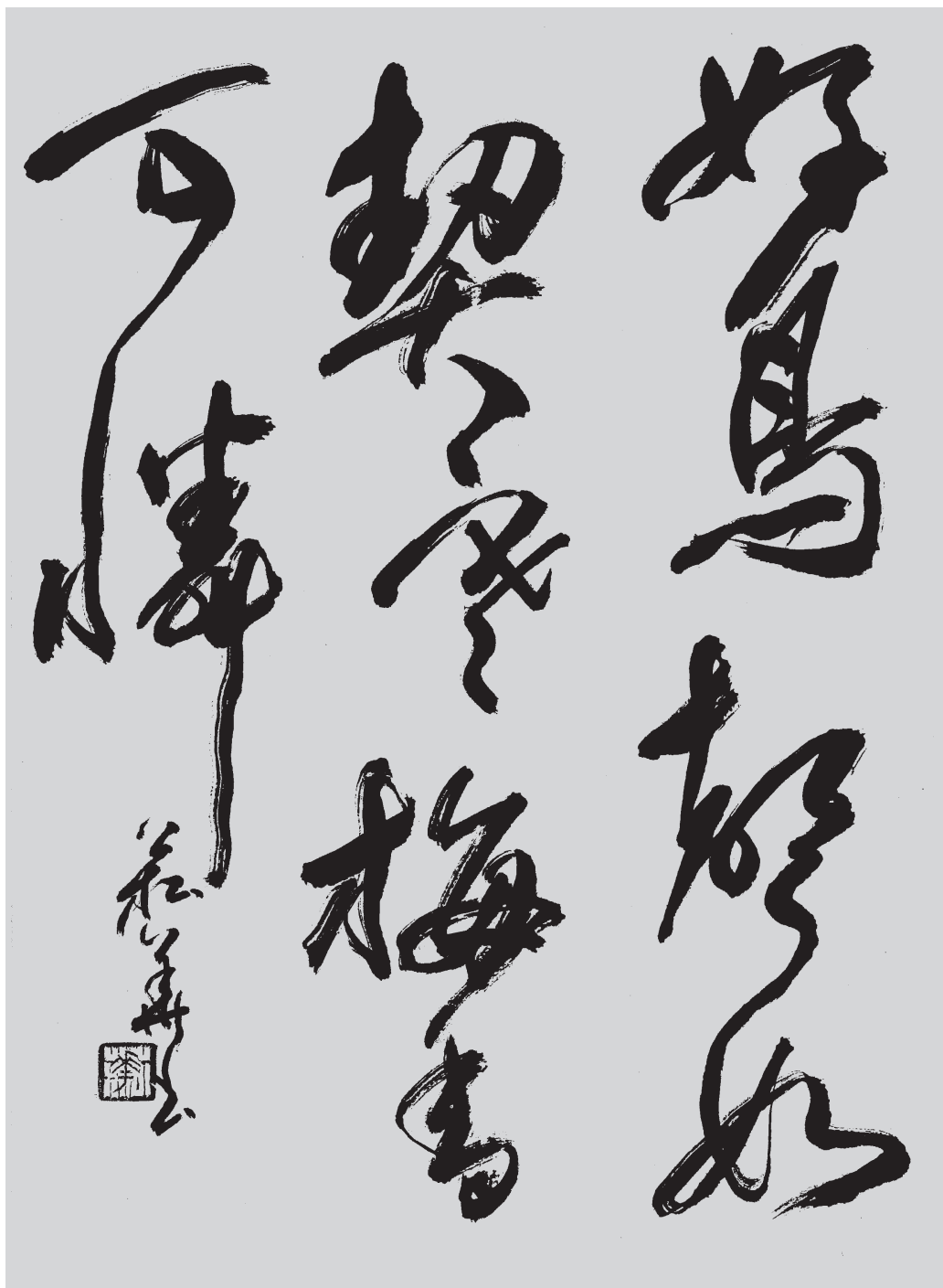
ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも (万葉集 柿本人麿)
 比さ可多能天の香具山このゆふ部霞多那日久春立つらし母

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも
 比さ可多能天の香具山このゆふ部霞多那日久春立つらし母
 朴花書

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

小暮 松華 先生 書

好鳥聲如契 寒梅香可憐 (呂發)
こうちょうこうれ こと かんばいこうあわれ
好鳥声契うるが如く、寒梅香憐む可し。

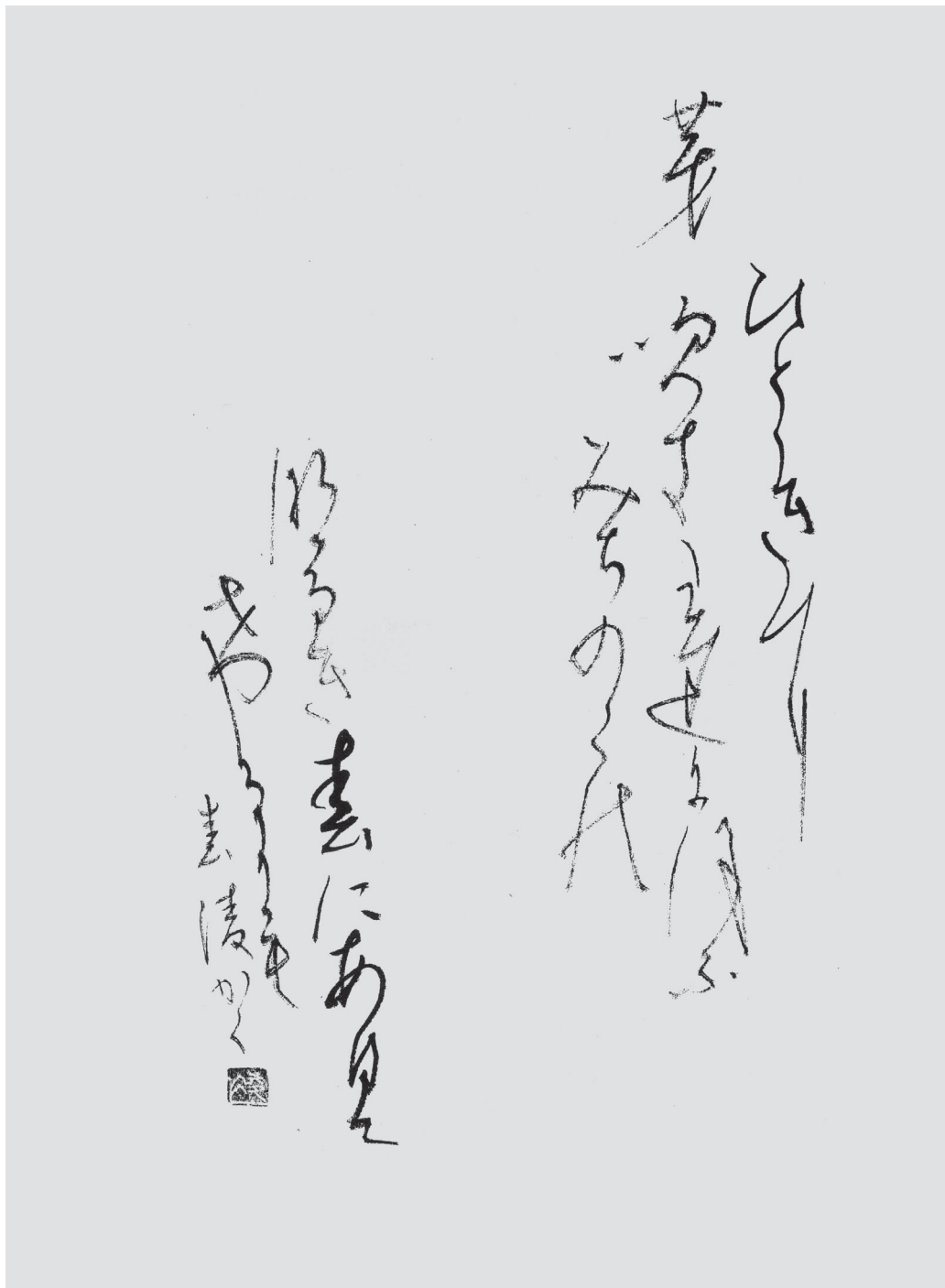


訳…うつくしい鳥の鳴く声は愁えるが如く、早春の寒梅の香は愛すべきものである。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

武井春凌先生書

ひとときに芽吹きたち匂ふみちのくの明るき春にあひにけるかも（平福百穂）
ひと、き耳芽吹支多遅尔保ふみちの久能明るき春にあひにける可毛



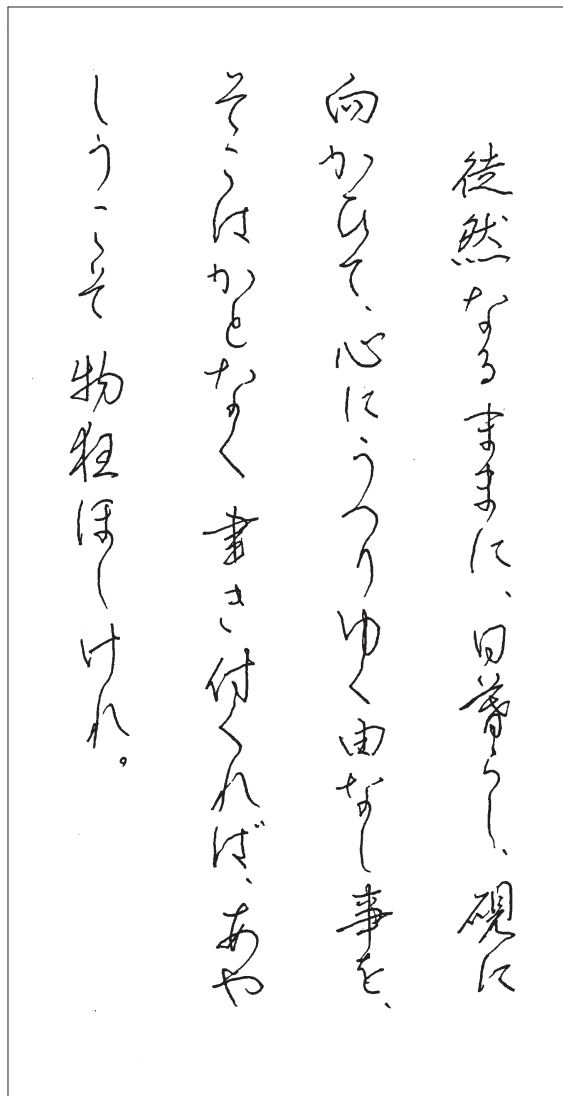
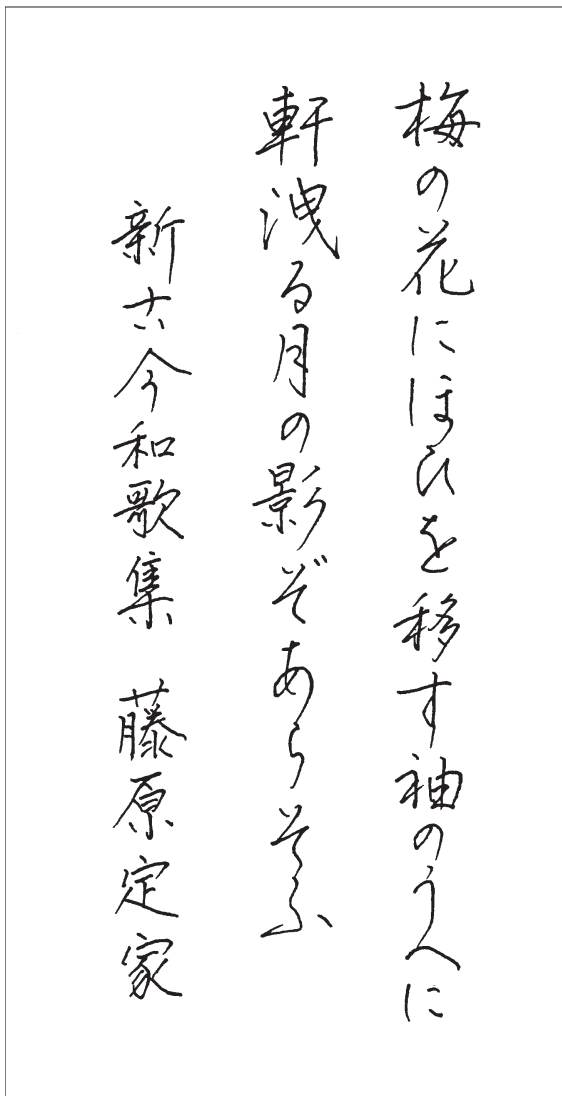
◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

赤木典子先生書

川上香蓉先生書

課題2 (初段格以下)

課題1 (初段以上)



課題1 (初段以上)

徒然なるままに、日暮らし、硯に
向かひて、心にうつりゆく由なし事
を、そこはかとなく書き付くれば、
あやしいこそ物狂ほしけれ。

〔徒然草〕 吉田兼好

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。
- (2) ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (3) 段級欄は本人が記入(色は黒)。
- (4) はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に)次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2 (初段格以下)

梅の花にはひを移す袖のうへに
軒洩る月の影ぞあらそふ

新古今和歌集 藤原定家